

星空市場

古天文学・天文学史と天文学の関係について

本誌『天文月報』92巻2号の「星空市場」に、佐藤明達氏の『「ナスカの地上絵とマリア・ライヘ」、『インドの伝統天文学』は、……天文学そのものではなく、……古天文学、天文学史に属するものです。その方面の学会誌に発表するものが筋ではないでしょうか。』という投書が掲載されているが、それに関連して若干の私見を述べたい。

私が執筆した「インドの伝統天文学」は天文学史に属するものであり、天文学史は天文現象そのものではなくそれを研究する人間活動を対象とするのであるから、社会科学の一種であって、狭義の天文学には含まれない。しかし、そのことは天文学者が天文学史を知らなくても良いことは意味しない。

そもそも天文学者の中で自分の専門分野の研究だけをしている人は少数で、むしろ大学での概論的講義やプラネタリウム等での一般講演も行い、時には天文学史の話題も取り上げる、という人も多いと思うが、その際に参考すべき天文学史の信頼できる文献は余りにも少ない。私の記事を注意深く読んでもらえば解ることだが、これはすでに「その方面」の専門誌に発表したことから、一般の天文学者にもこの位は知っておいてほしいということを選んで解説したものである。「その方面」の専門的論文は、歴史学や古典語学などの予備知識を必要としていて一般の天文学者による通読には適さないものも多いので、天文学者向けの天文学史の解説は今後とも掲載していくことが必要であると考え。

次に、海部宣男氏の「ナスカの地上絵とマリア・ライヘ」に関しては、私には発言権はないが、これは古天文学、天文学史ではなく、天文考古学に属すると見るべきであると思う。天文考古学とは、ある考古学的遺跡について、天文との関係の可能性の有無そのものを研究する

ものであるから、考古学の一分野であって、天文学と実際に関係があるかどうかは個別に検討を加える必要があるように思う。

さて、「古天文学」は周知のように齊藤国治氏の造語であるが、これを天文学そのものでないとする佐藤明達氏の見解には問題がある。「古天文学」という用語の是非について、かつて『天界』誌上で長谷川一郎氏（NO.769, 1989）、齊藤国治氏（NO.772, 1989; NO.849, 1996）井上猛氏（NO.791, 1991）、佐藤明達氏（NO.794, 1991; NO.799, 1991）、大崎正次氏（NO.796, 1991）によって論争され、現在は『文部省学術用語集・天文学編・増補版』（丸善、1994）に採録されている。英語名 palaeoastronomy は大崎正次氏の提案である。この「古天文学」の分野について、齊藤国治氏は、(1) 考古天文学、(2) 歴史天文学、(3) 民俗天文学からなるとしているが、齊藤氏の実際の仕事はほとんど歴史上の天文記録を現代天文学によって解析する「歴史天文学」のものである。この「歴史天文学」の研究対象は天文現象そのものであるから、天文学の一分野であると見るべきである。このことは「考古天文学」や「民俗天文学」が人間活動を研究対象としていて社会科学の分野と見るべきであることと好対照をなしている。

以上のことから、これらの諸分野と天文学の関係を次のように明確化するよう提案する。

(1) 天文学にふくまれるもの：

「歴史天文学」(historical astronomy)

(2) 天文学と関連が深い、社会科学の分野と見るべきもの：

「天文学史」(history of astronomy)

「天文民俗学」(astronomical folklore)

「天文考古学」(archaeoastronomy)

大橋由紀夫（東京都）

編集後記

「新編集委員より一言」

前任の末松編集長からバトンを受けましたが、これまでの歴々の編集長と比べるべくもない頼りない編集長です。ただし編集委員には強力な人が揃っていますので（編集事務局も健在ですし）、これから2年間この体制で頑張らせて頂きます。より一層見やすい紙面とこれまで以上の速報性（特にすばるを始めとした新しい計画から生み出される最新のデータ）が実現できればと思っております。何はともあれ現実には皆様原稿が月報の命ですのでよろしくお願いいたします。2年前編集委員としてこの原稿を書いていた時の気楽さが懐かしく思い出されます。（上野宗孝）

いつも研究の息抜き(?)に楽しく読んでいた月報の編集委員になるとは夢にも思っていなかったのですが、上野編集長から声がかかってしまったのは断れませんが、まずは原稿依頼、集めに努めたいと思います。編集関係の仕事は、まったくのはじめてですので何かと至らないと思いますが、よろしくお願い致します。（和田桂一）

天文月報編集委員という大役を引き受けてしまいました。はじめのうちは頭の中で企画をめぐらせ楽しんでいたのですが、だんだん原稿集めの苦勞がひしひしと伝わってきて、たいへんなことを始めてしまったなと思っています。かつて勤めた公開天文台で発行した冊子の編集経験を活かしつつ、社会教育関係の記事集めに貢献できるかと思っています。よろしくお願い致します。（小野智子）

居ても居なくても同じような幽霊委員ですが、何故か居残ってしまいました。つまり、これで21世紀まで編集委員であるわけです。ここで何か書きたいのはやまやまですが、2年前の編集後記を読み直して赤面し、断念しました。（大橋正健）

宇宙研で気球をいじっている斎藤です。お蔭様で守備範囲が広がったのですが、広くなりすぎた気もしないでもありません。来るものは拒まず、天文月報の編集委員も引き受けてしまいました。聞くところによると、原稿を集めるのが大変だとかいう話ですが（身に山ほどの覚えがあります...）、ほちぼちがんばります。（斎藤芳隆）

新しく編集委員に加わりました。まだ右も左もわかりませんが、無事ファーストライトを迎えたすばる望遠鏡や関連装置の話題も、もっとお伝えできるよう企画を考えたいと思っていますので、皆様ご協力よろしくお願い致します。（田村元秀）

大学院から数えると、天文の世界に関わってはや10年目。その間の観測技術、コンピューター、理論研究の進化は目ざましく、ふと気が付けば、周りは良く知らないけれど面白そうなことであふれているではありませんか。この際、自分で調べるより、良く知っている人に聞きまくってしまおう。と言うことで皆さん、原稿の依頼に伺います、よろしくお願い致します。（内藤統也）

東京学芸大学の土橋です。専門は電波天文学で、暗黒星雲と星形成に関する研究を行っています。平成11年1月より月報編集委員になりました。電波天文学に関することを中心に、良い記事・面白い記事を沢山集めようと思います（研究者の方のご協力ください!）。また、私は教育学部に所属しておりますので、天文や理科の教育に関する記事も集めようと思います。どうぞよろしくお願い致します。（土橋一仁）

編集委員	上野宗孝（編集長）、大橋正健、小野智子、斎藤芳隆、田村元秀、土橋一仁、内藤統也、和田桂一				
平成11年3月20日	発行人	〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1	国立天文台内	社団法人	日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12		啓文堂	松本印刷
定価700円（本体667円）	発行人	〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1	国立天文台内	社団法人	日本天文学会
TEL: 0422-31-1359（事務室）	/ 0422-31-5488（月報・欧文編集）		FAX: 0422-31-5487	振替口座	00160-1-13595
日本天文学会のホームページ	http://www.tenmon.or.jp		月報編集	e-mail: gpjimu@tenmon.or.jp	